

〔第14回学術集会シンポジウム〕

核家族・少子化時代のマザーリング～助産所の活動から～

とも子助産院代表

伊藤 朋子

平成12年5月に助産所を開業し、これまでに約300件の分娩介助をさせていただいた。「お産を家族の出来事として、家族を丸ごとケアする」ということを信条にしている。「ファミリーファースト。助産所利用者も職員も家族を一番に」。そのため、小さな助産所には不釣り合いなほど多くのスタッフによるワークシェアに支えられ、これまで続いてきた。

休日に一家総出でエコーを見つめる妊婦健診や、昨日妹が生まれたお兄ちゃんが今朝は助産院から保育園通い、夜は赤ちゃんを囲んでパパも一緒に母児同床、子連れ出勤の助産師が自分も授乳しながら保健指導……といった風景が当助産院の日常である。

病院での出産が主流の現代日本においては、開業助産師による分娩は全体の1%である。しかし毎年実数は微増。当助産所のある宮城県仙台市は、人口100万人の政令指定都市で、年間約1万人の出生がある。産科医不足は他の自治体同様に深刻で、平成17年秋より「仙台産科セミオープンシステム」という分娩集約化の試みが開始された。「健診は近くの診療所で、分娩は医師の多い大病院へ」という仕組みである。しかし、医師のいない施設である助産所での分娩や、分娩前後のケアを助産所に望む方が少なからずおられる。

助産所の運営にあたり、各医療機関や地域の保健センターとの連携は欠かせない。もちろん母児の安全が大前提である。当助産所を訪れる妊産婦さんの第1ニーズは医療ではなく、継続ケア、機動力ある往診、家庭的な雰囲気、上の子供の同伴入院、きめ細やかな母乳育児支援、病院出産後の産褥入院など、助産所ならではのケアである。少子高齢化・核家族化に伴う家族力の低下が、無関係ではないと感じる。

「母性は本能ではない。学習し体得するものだ」といわれるが、育児体験のないまま親になるカップルが多くなっている。ミルク育児全盛期に子育てを

した祖父母はマニュアル育児の第1世代で、母乳育児文化の伝承は途絶えがちである。さらに晩婚化により祖父母もすでに高齢のため、退院後の母子に十分なサポートを提供できないこともある。また、仙台は通勤族の多い地方都市である。地域のつながりが薄いまま母子カプセルの中で息苦しい育児に入り込むケースも見受けられる。分娩施設の統廃合により、1施設あたりの分娩件数が増加、産後の入院日数は減少傾向で、不安を抱えたままの早期退院が与儀なくされている。

親が親らしい育児行動とることをマザーリングという。生まれきた赤ちゃんを慈しみ安心して育てていくためには、ただ生命肉体的に支障なく分娩を終わらせたというだけでは、自信のある自然な育児行動にはつながらない。分娩は女性が生まれ変わる機会である。分娩や育児を通して、母親が「私はありのまま素晴らしい」という自信と自己肯定感を持ち、「お母さんって、すごい」という家族からの尊敬を受け、また「いつも見守っているよ。困った時はいつでも助けてあげる」という地域のサポートを実感できることで、女性は母として生きていく力を獲得できるのだと思う。育児支援を地域の仲間作りの面からもサポートするサークル活動が、妊産婦さんに好評である。かならず、託児をつけるか子連れOKの会としている。そうでないと経産婦は参加できない。経産婦にこそ、手助けが必要と感じる場面は多い。

分娩の安全と快適のバランスを保ちつつ、家族にも居心地がよく、ここで働く助産師もマザーリングマザー（母親となる女性を母親のように温かく世話をしあける人）としての役割を果たせる助産所を目指したい。子連れ出勤や、勤務時間の工夫など、子育て中のスタッフもまた、ワーク・ライフバランスを保ちつつ働き続けることができるワークモデルを追及していきたいと考えている。